



俳

句

梅田其夕

婚を得し姉に熟柿の紅の透く

赤い羽根胸につけられ農婦羞ず

秋天を覗くピエロの仮面の素顔

赤い羽根つけて日雇労働者

風雪の地下足袋は日雇の勲章

冬雲の形とならず無職の掌

秋天へ聖火あかあか揺れつづけ

本名 梅田栄吉 六十五歳 日雇 大阪出身
高浜虚子の門人、其夕という雅号も虚子翁か
らつけてもらったもの。
以来五十三年間俳諧の道に没頭している。
どこへ行つても紙と鉛筆は放さない。コーヒ
が好きで、喫茶店の片隅で半日も坐り続けて
句作に没頭している彼の姿を度々見かける。
正しくこの道に徹し切つた人といえます。
結成十周年を迎えた、西成俳句会結成メンバ
ーの一人。
この人も裸の会の誇りとする会員の一人であ
る。
(松原記)



偶 感

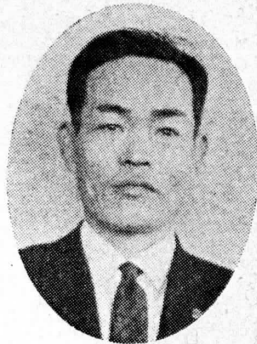
大 坂 矢 郎

今更改まつて言うこともありません
明日の天気が気にかかるだけです
底辺で生きること苦になりません
ここにも笑いがありますから
世間の目にも平気になりました
新しい物の見方が出来ましたから
何が不幸かもわかりました
それは心の貪しい人です

何が淋しいかもわかりました
愛の対象がない生活です
何を喜ぶべきかもわかりました
毎朝体が軽く起きられることです
お金で買えないものを身につけました
生きる厳しさと尊さを知ったことです

本名 川知圭介 三十六才 大阪府出身 労務者 独身
もとからの肉体労働者ではない。
曾って軽演劇の脚本を書いていた。その当時のボードビリヤンの中には、いま流
行つ子になつている者もいて、ときに、路上で再会することもあるらしい。先方
は鷹揚に挨拶するという。かつての先生は、いまは一労働者としてこの成功者
を見ると、なにか変な気がするという。苦笑という言葉だけではいい現わせない
彼の複雑な表情が目に見えるようである。彼の短歌「土工一年句」は、そうした
苦しい心境の中で歌つたものと思われ、意欲を棄てず、黙々といのちを燃やし続
ける彼の人間としての風格がよく現われている。
現在の仕事にはようやく馴れ、自信もついて来たらしいが、彼に、彼だけしか出
来ない仕事か、もしあるとするならば、安穩に溺れることなく、たとえ苦難が予
期されても、敢然とその道に進むのも男子の本懐ではなからうか。
誠実この上ない人。会員四百の中でも最も信頼してつきあえる一人として推薦す
る。

(広野記)



俳

句

黒木安志

秋の楽章地下足袋の指踊らする

持越の銭あり風邪を軽うする

木枯に後頭叩かれ掘るほかなし

野仏も只の石なり寒波来

冬ざれの石蹴る石を己とす

本名 黒木安志 三十九才 宮城県出身

郷里の延岡商業学校卒業

自動車運転手、事務員等の職歴があり、現在釜ヶ崎の日雇二年生である。

昭和三十六年一月頃から西矢籟史氏に師事し、俳句を習い始める。翌年の六月裸の会に入会、現在西成俳句会、脈、俳句作家、河大阪俳句人協会等に所属している。

俳句に生魂を傾けているが、詩も書く器量人である。それだけに彼の俳句には含蓄があり、フレツシユなものがある。将来裸の会俳壇を背負つて立つてもらえる人と思つています。ここで、日雇生活から足を洗い、安定した生活に入つてもらいたいと思ひます。

(松原記)



パンドラのラジオ

小 卷 誠 之 助

父の情けで

人並に

トランジスタラジオを持ってみました

小さい箱の中では

青春がほとばしるような

ハッスルしたメロディが流れていました

けどそれは

二十四時間のはかないいのちでした

感受性の鈍くなった私には

甘いメロディよりも

一杯の酒と

ひと切れのパンを選ばしたのです

本名 同じ 京都府出身 三十九才

あちこちの飯場で働らくほどだから、怠惰とはいえないだろう。けれども、なぜか釜ヶ崎に帰つてくると乱酔して、ふところをハタイてしまう。だからこの地区で見るときはいつも酔っている。

よく会長を訪ねてくる。酔つていて相手にされなくても出直しては来、出直してはやつてくる。面と向つては、よく叱られているが、会長は「どうも憎めない男だ」と洩らしている。それというのも、彼が本質は非常な人情家で情にもろいためだろう。それは彼の素直な詩を見てもわかる。旧制中学を出ているが素直すぎて、ときには幼稚な詩になるが、またときには巧みすぎて大へんな傑作をモノす。

君よ、自虐ばかりが能ではなからう。それに、暖かい眼で見えてくれる人へなれあまえることは心すべきであらう。

好漢自重を望む。

(広野記)



俳

句

陰山重水

質物の利子またかさむ梅雨の憂うつ

一畳の部屋梅雨めきて獣の如くねる

梅雨晴の種子ほじくり幼児が来る

暑き夜は布団の埃を二度はらふ

無能を鼻に得々として夏を活歩す

本名 陰山重水(シゲミ) 高知県出身 五十八才
小学校訓導九年(この間妻と死別) 組合書記、丸通会計等の職歴あり。

彼もまた戦争犠牲者の一人。家を焼かれ、無一物となって虚脱状態の数年を過したのち、郷里のダム工事現場の労働者となり働らくうち、たまたま学友の間組の技師と再会、一級汽缶士の資格のあるところから責任者として迎えられた。その矢先、独り息子を同じダム工事で殉職させた。彼の人生観を変える大きな事件であった。

彼は郷里に息子の墓を建て、自分自身の名も刻んだ。いまは、何とか人に迷惑をかけずに、早くこっそり死に得ぬものかと思うだけだという。

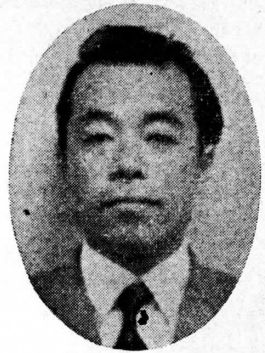
東京にいったが、そんな彼に、東京の水は合わなかった。大阪に來た。釜ヶ崎に來た。そして、食べるだけのアンコをしている。暴動の前年、三十五年である。

彼の俳句歴は古い。にも拘らず、句会にも出ず、投句もしない月がある。これは彼の厭世感につながる。

彼はいう。パチンコや競輪に目の色変えている馬鹿ものども、裸の会の幹部づらをしている哀れにも悲しい野郎ども、

実に辛らつである。これほどはつきりいう男もない。もともと、裸の会には幹部も役付もないのだが――。

さて、重水君よ。裸の会にも二人や三人はあんだと胸を開いて話せる男がいるのだが……
(広野記)



新 年 高 城 守

新年は
子供の頃
ただ楽しかった
青年になり
浮き浮きとして
じっとしていられなかった
成人しては
ただあわただしかった
そして

この街に来て
何も感じなくなつた
……
だが今は
詩をかく

本名 大沢良夫 三十歳 大阪市出身
四年前から釜ヶ崎に住みついて日雇仕事をしているが、少年時代は相当裕福な家庭で過ごし、同志社大学に学んでいる。
一時サラリーマン生活をしたこともある。後京都や神戸方面で飲食店を経営したが失敗し、フランス料理のcockとなつて働いたこともあるという。
友人達から「仕事の虫」と言われる位実によく働くが、それは、いわば彼は、仕事に徹し切れる人間であることを、自ら立証しているといえるのです。
釜ヶ崎という抱擁力のあるこの街には、時代の波に押し流され、やむなくこの町にやつて来て、やがて立ち上るべき機会を、じっと堪え忍んで待っている人が多いが、彼もまたその中の一人と言えるでしょう。
この人の詩を読んでいると、自分という者に対し、最も誠実に生きようとする生活態度がうかがわれるのである。
京都美術大学の先生に指導を受けたことがあると言っただけあって、絵筆を取ると、天下一品の絵を描きかねないと思われる程、素晴らしい絵を描く器量人である。この街で、いつまでも埋もれた紳士であつてもらいたくない、と思つて会員のひとりである。
裸の会を抛り処として、あなたの力量を最大に發揮することが出来る道を見出し、敢然とそれに取り組んでもらいたいと思います。
(松原記)



失なわれた祭礼

紀 知 田 朗

すっかりセンスの変わった

ふるさとの道を

祭礼の山車が通る

長い伝統に培かれた素朴な情緒を

守り続けようとする列が――

傍らのハイウエーを虚飾のピエロ達が

蛮声を投げかけながら疾走する

時の圧力に

かつてのイメージは儚なく崩れていく

俺のところに

失なわれたものへの忿懣と

そして――懐旧の情が交錯した

さようなら！

ふるさとの祭礼くん

もう君を訪れることはないだろう

本名 吉仲吉太郎 五十三歳 滋賀県出身 日雇

この人の安定所生活も長い、しかし真面目でコツコツ仕事をする型なので、いつもどこかの直行にいつて認められている。時々特長のあるユーモア百パーセントの作品を発表しているのは御承知の通り、従って紹介文も彼自身が書いたものを使う。めんどくさいからではない乞うご諒承――。

親父のスネをカジリ飽きたあげく会社事務員、自家営業、ともにソロバンのはじきそこないで見事にダウン。以来地下足袋と親しみながら釜ヶ崎に定着。さいわい内助の功よるしきを得て何とか生息を続けている。二女あり、上は最近結婚し、下は高校一年生。裸の会入会を機に、めしより好きだった麻雀と絶縁、目下ささやかなダンランづくりに専念中。

(田結記)



俺は解体屋

中島昭二

じりじりと肌に焼きつく太陽。汗とほこりで真っ黒だ。それでもきょうもがんばった。俺の仕事は解体屋。俺が住んでいる三畳の間を思えば、この家の広いこと。まだまだ住めるこの家に、俺はシットを感じた。

やがてドドツと大きな音と土ほこりを残して崩れるだろうこの家、シットめいたものがロープを握る手に力を加えるハザマ見るノVそんなとき叫ぶお前だ。お前は目に見えないロープ、悪魔のロープで引き倒され、人生を解体されたのだが、あれから何年——いまだに再建されない。

今こわされたこの家は、数カ月後には立派な四階建のアパートにな

るのだハザマ見るとはお前だよVそんな声がどこかでする。日やけした黒い顔と手、汗とほこりでどろどろになった体、それをみつめる俺の眼には、一粒の涙が光る。陰の声はつぶやきながら解体屋を見つめる。

本名 中島昭二 38歳 兵庫県出身 日雇
京都商科学校を中退してから工具、農地開拓民、清掃局人夫、臨時工員、ラーメン屋、日雇などと数々の遍歴をたどっている。
「俺は解体屋」を読んでいると、過去を詳しく語らない彼だが、彼が遍歴の道をたどらねばならなかった動機がわかるような気がするのである。
釜ヶ崎に住みついてから六年になるというが、決して自己を卑下することなく、常に自己を厳しく見つめながら生きていく彼の生活態度は実に立派である。
これまで裸誌に掲載した彼の随筆には「雨に濡れて」「鯉のぼり」「ジャボン玉」等の佳作がある。この人の文章を読んでいると、なぜかほのぼのとした人生の温さを感じるのには私ひとりではあるまい。
裸の会結成当時のからの会員なのだから、これからもいいものをどしどし書いてもらいた

(松原記)



俺はピエロ

米近博幸

俺は幼い時から冒険が好きで

軽業師になろうと思い

五歳のとき家をとび出し

曲馬団にはいった

そのため俺は満足に学校にもいけなかった

俺が身につけた特技は

空中ブランコだった

悲しいピエロにもなった

芸の道は厳しかった

今俺は釜ヶ崎に住む日雇労働者だ

俺はろくすっぽ学校にも行けなかったが

生きていくことの厳しさだけは知っている

だから俺は

一日働かなければ一日が生きられない

厳しい生活にも堪えていけるのだ

本名 米近博幸 四十四歳 広島県出身 日雇 独身

子供の頃から冒険好きであった彼は、五歳の時軽業師に憧れて家出をし、広島市内で興業中の有田洋行会に入れてもらい、国内にとどまらず、遠く朝鮮や満洲、中国、沖縄、台湾、ハワイ、ロスアンゼルスと、方々を転々として渡り歩いたという。

従って小学校にも満足行っていないが、独学で勉強したと見え、むつかしい医学書や手相学の書物等を盛んに読んでいた。

十二歳の時嫌になって一度故郷に逃げ帰ったが、一カ月位して又家を飛び出し、金城曲馬団に入る。ここで様々な曲技を身につけたが、特技は空中ブランコ乗りだったとのことである。

その間大東亜戦争で広召、船舶工兵として活躍中終戦を迎えてフィリピンで捕虜となる。昭和二十三年十月復員してから暫く父の大工仕事を手伝っていたが、再びサーカス団に入る。昭和三十六年にサーカスをやめ、釜ヶ崎に来て日雇労働者となる。

軽業師という厳しい芸道一筋に生きて来た人であるだけに、生きることの厳しさを充分に噛みしめている人である。

(松原記)



望

郷
中
村
意
治

通天閣に灯がともり
どやの夜空を照らす頃
俺もねぐらに急ぐんだ
すっからかんで何もない
誰も待たない小さな部屋へ
だけど心は楽しいんだ

きれいなやさしいかあさんも
髯を立ててたとうさんも
泣いてすがった女房も
可愛い瞳のわが子等が
今夜もおいらを待っている
夢でおいらを待っている

別れた人も会えない人も
冷たいけれどわびしいけれど
そっと臉をとじてたら
うらぶれ果てたこの俺を
みんな両手を差しのべて
俺を迎えてくれるんだ

本名 中村意治（おきはる） 39歳 大阪府出身 日雇
大阪市立鶴橋高等小学校を卒業後、長崎で炭坑の保安要員を振出
しに、大阪府巡査、会社員、カトリック教会の用務員等の転歴をも
つ。ふとした心の痛手から、三年前に釜ヶ崎へやって来た。そして
日雇となり現在に至るが、酒に溺れることもなければ、ギャンブル
に手を出すこともないこの人は、やがて釜ヶ崎を脱出し、安定した
生活を確立する日も遠くはあるまいと思う。
詩歴は浅く、そのため表現方法にはやや新鮮さを欠くが、この人
がもつ詩神の豊さを私は買っている。
真実一路に生きようとするこの人も、裸の会を心の寄り処として
生きている会員のひとりである。釜ヶ崎には、このような人達がた
くさん住んでいるということを、認識してもらいたいものである。

（松原記）



俳

句

中
村
広
吉

ようやくに新居になれて椿さく

ひっそりと水仙白し雨上がり

無職の日まゆかゆうなるひばりかな

パラソルは既知の顔なり既婚なり

妻追う足ゆるめば夏の雲生れる

本名 中村広吉 昭和四十二年六月二日歿 享年五十四歳 大阪市出身 日雇
宮大工の棟梁の三男として生れる。都島工業高校を中退してから大工をして傍らいて来
たが、酒好きなことから十数年前に妻子を残して家をとび出し、西成に来て転安の日雇と
なる。

酒を飲んで来ては、無理な相談をもちかけられて悩まされたことがたびあったが、
根は正直な人間で、仲間達から好かれるよい一面をもっていた。

古くからの会員であり、この人も孤独に生きて来ただけに、裸の会を心の寄り処として
いたとみえ、会の行事や会合には欠かさず出席していた。

多くを語らない彼であったが、彼の遺作句には、孤独に生き悩んだ彼の思念がにじんで
いるのを感じるのである。節酒していれば、まだまだ生きられたし、この夏のレクリエー
ションに参加できたのと思うと、残念でならない。

(松原記)



短歌

遠山一峯

底辺の生活(たつき)になれて今日もまたゴミ車曳くこの朝早く

いつの日かこの生活(たつき)を抜け出さん安住の地かここ西成は

住み慣れてしみじみ想う釜ヶ崎この街もよしこの人もよし

釜ヶ崎から足抜くべしと友は言う厚意なれども吾れには悲し

帰れよと児等勧めども老醜はなおかたくなに西成に住む

疲れことに強くおぼえぬめぐらめく炎熱のもと碎石をまく

小さくもわが一城よこのドヤに今日も疲れし体よこたう

本名 遠山市十郎 昭和三十九年二月十五日没 享年五十八歳 淡路島出身
この人は、郷里で書店を経営していた事もあると言っていた。家庭の事情で家を出て、釜ヶ崎に住みつき、日雇生活をして余生を終えた人である。彼は生前、彼の身の上話を私に話してくれた事がある。

大阪市内に妻子が住んでいて、子供達が何度も迎えに来た事があるが「今更どうして帰られよう、父帰るでもあるまいし」と言って淋しく笑っていた面影が、今なお私の眼底に残っている。

酒のまず、誰にも迷惑をかけることなく、孤独と貧苦に堪えながら、釜ヶ崎で生涯を閉じた人である。裸誌に投稿している彼の歌を読むと、肉親への慕情に日夜さいなまれたであろうと思われ、彼の胸中が察せられるのである。

長い斗病生活の果て遂に、細々と燃やし続けた生命に終止符を打ったが、実に善良な人であった。この人も日雇い暮らしをしていた人とはいえ、釜ヶ崎では立派な紳士のひとりであったといえるでしょう。

(松原記)



野良犬の歌

川端寅男

昔暴れた釜ヶ崎の空も

いまは冷たい

おれの人生も

足の骨を折ってからというもの

何の楽しみもなくなった

おもしろくないと

腹が立つ

だけどおれは

お好みを焼いて

ほんのちよっぴり金をもうけて

おれなりにがんばろう

そのうち釜ヶ崎の空も

あたたかくなるだろう

お天とうさま

ありがとうございます

本名 川端武彦 昭和41年8月20日歿 享年41歳 大阪市出身 元日雇
小学校卒業後店員、工員など転々と転をかえ、一時はよせ屋をやって成功したこと
があったが、酒好きが原因して失敗し、釜ヶ崎に来て日雇労働者として働くようにな
ってから十年になる。いわば釜ヶ崎十年選手といったところ。

釜ヶ崎に来てからも好きな酒は断ち切れず、そのため身もちくずした彼である
が、なんとかして立ち直りたいという気持から、自ら精神病院行きを志願し、十一回
入院したことがある。

酒を飲むと大声でどなっていたせいとかどうかは知らないが、ドラ公というニックネ
ームがあり、どなるとまるで虎が吠え立てるようでもあった。でもとても人なつっこ
く、淋しい人間のひとりであった。

酒がわざわいして、遂に行倒れの状態でこの世を去ったが、彼の死こそ、酒好きの
仲間たちへのよき警告ではなかったかと考える。「野良犬の歌」は、彼が裸誌に書き
残した唯一の詩である。この詩には彼の人間性がよく現われている。私は時々裸誌の
ページをめくって彼のことを思い出してやりたいと思っている。

(松原記)